

---

# 魔具店の店長は異世界人

ニック

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔具店の店長は異世界人

### 【Nコード】

N4517K

### 【作者名】

ニック

### 【あらすじ】

この物語は「ネギま」の世界にやってきた青年が魔具を取り扱う店を経営するお話です。

ド派手な戦闘もシリアスな展開もありますが、のんびり楽しめる作品を目指して頑張ろうと思います。

申し訳ありませんが更新は不定期です。

## プロローグ（前書き）

どうもニックと申します。

ゼロ魔のファンフィクションを連載中の身でつつい欲望に負けて書いてしまいました。

少しでもお楽しみいただければ幸いです。

## プロローグ

？

扉を開けるとそこは異世界だった。

絵物語や小説ではわりとメジャーな現象だった。

しかし、自分がそのような奇妙奇天烈摩訶不思議な超常現象に陥るとは、先日できた彼女としつぱり初夜を添い遂げていた蜜月の間には夢にも思わなかった。

もちろん、意中の恋人とラブラブチュッチュしている時間に、そんな事を考えている人間がいたらそいつは間違いなく男として終わっていると言断するが。

来訪当初、自分の置かれた状況を認識できず、いや、理解はできるが受け入れられずに頭を抱えて悩み転げまわったものだ。

そして冷静になって、何をすべきかと悩んだ結果。

とりあえず、床に両手を着いて頂垂れて悲劇の主人公ぶってみた。

……えらい似合わなかった。

今では立派な黒歴史である。

さておき、異世界となれば、そこには中世ヨーロッパ風の街並みが広がっていて      とか

ゴブリンやらオークやら見たことも無いような幻想種が存在して  
いて      とか

汝が我が主か      とか

そついうある種のお約束な出来事は無く。

本当に異世界なのかと思うほど、都会の街並みも田舎の町並みも一般的な常識も元の世界とは、ほぼ遜色無いものだった。

だがやはりここは異世界だった。

違いといえば、まず自分の家に居るべき両親がいなかった。

後にわかった事だが、そもそも戸籍上にすら僕の両親含め親族一同存在しない事になっていた。

何かの悪戯いたずらかと家内を隈なく搜索してみると、自分の知る家の風景とは大きな差異があったし、僕らの一家が住んでいた場所には見知らぬ独り身の老人が住んでいた。

さらには通っていた学院も存在していなかった。

と云うか主にそれが理由で『ココ』が自分のいた『世界』じゃないと思惑する切欠だったのだ。

まあ、その当時の話は割愛しておこう。

決して当時の自分のあまりの混乱狂乱おっくうっぷりを説明するのが億劫おっくうになった訳では無い。

ほんとだよ？ ……グスン。

そんなこんなで過ぎ去った怒涛の混乱ラッシュな日々を過ごしていた私だが、『コノ世界』にとつて僕が一般人では無く、立派な異常者だと云う事を理解するにはさして時間はかからなかった。

ここでの異常者とは、威風堂々揚々と表の人間として過ごせる身の上では無いという意味だ。

ハハハ。これには僕も吃驚したよ。

なぜなら

『コノ世界』では一般的に『魔術』の存在が秘匿ひそされていたのだから

僕の置かれた状況を一緒に悩んでくれて、戸籍上の養子にまでしてくれた爺さんから初めてこの話を聞いた時の衝撃は世界へビィー級チャンピオンのボクサーが放つ乾坤一擲の右ストレートがモロに男の大事な急所に直撃した時の衝撃くらいにショックを受けた。

それと同時に酷く焦った。

なぜなら僕のいた『アノ世界』では魔術なんて小学生でも知ってる常識だったし、魔術と科学なんて殆ど同義語でいいだろうってくらいに魔術が社会に溶け込んでいたのだから。

爺さんなんかは、その話を聞いて年季の入った皺くちな顔面をさらに皺を寄せて破顔していたのを覚えてる。

？

僕が居た『アノ世界』で僕は学生をしていた。

『コノ世界』では研究者と言ったほうが近いのかもしれないが、多くの魔術師見習い達が魔術の原点を研究したり魔術の応用を学ぶ高等学院。

その中で僕はそれなりに上位の成績を 失礼、中堅やや上くらいに居た。

だが今にして思っても『アノ世界』で成長しようが僕が大成することは無かっただろうと思うし、その積もりも無かった。

将来的は両親が経営していた魔具店を継いで、愛しのワイフと子供を作ったり、子供とキャッチボールをしたり、仕事に明け暮れたりと、平々凡々な日々のサイクルを繰り返し、それなりに楽しく思える人生を終えるつもりだったのだ。

大志を持つとは言うけれど、そんなモノは世に生を受けて20年程の歳月を過ごせば大志なんてモノより諭吉大観音様を生活苦に喘がない程度に稼ぎたいと思うようになるのは決して不自然では無いはずだ。

少なくとも僕はそう思っていた。

平々凡々な日々を過ごせる幸せを噛み締めながら暮らす。

そんな人間になるだろうと思っていたし、そんな人間だった。

だから、そのスタンスは例え『コノ世界』に世界間移動をしてしまった今でも変えるつもりは無かった。

生きる世界が変わったからって生き方まで変える必要は無い。

そうだろうか？

？

話は一転唐突も無く変わるが実家の魔具店の話をしよう。

僕の家は東京都区外にある4階建ての古いビル3階部分を丸ごと買い取って住居店舗としていた。

店舗としてはともかくビルなんぞは住居として不便であろうと思われるかも知れないが、住み慣れれば案外快適で尚且つ仕事先まで自室を出て徒歩30歩圏内と云うのは利便性に優れていた。

おそらく両親がこのフロアを丸ごと買った理由はそれが大きいの

ではないかと思う。

取引先の人間を応接室で待たせて寢室のベッドでイチヤイチャ甘い時間を貪っていた両親の事をふと思い出した。

勤労者としては少々どころが大変頂けない勤務態度だが、それでも魔具作りの腕は確かで、魔術関係者で滝沢夫婦と言ったら一部でそこそこに知られている名前だったようだ。

一部でそこそこ。 まあ、つまりはマイナーって事だが。

それでも幼い頃は工房でカーンカーンと金属音を鳴らし魔具を錬鉄している両親にひびりついて、両親がまさしく魅<sup>み</sup>せる、流れるような仕事振りをチープな手品師に騙され喜ぶ子供のように食い眺めて生活していた。

だから子供の頃は絶対にこの店を継ぐんだ、と鼻息荒く宣言していたし、両親はそんな僕を微笑ましく見ていた。

元は灰色で統一されていたであろう工房の壁は油黒く汚くて、所どころ境界から漏れた魔力汚染のせいで赤褐色に変色している工房で、きつと10年後には僕もここで魔具を作ったり、営業に来たサラリーマンの対応をしたり、奥さんと子作りしたり……ゲフン。

そんな、大願とは口が裂けても言えないような地味な将来を僕は夢見ていた訳で。

その為にわざわざ電車で片道1時間もかかる高等学院に通っていたんだが、事件は突然急に起きた。

いつものように、自室のベッドから起きて最近になってどことなく色気づいてきてギャル化してきた3つ下の妹を起こしに自室の扉を開いたその瞬間に……

僕は世界を超えてしまったんだ

？

僕が世界を超えた、あの日からもう1年の月日が経った。

世界を超えた事による身体的ペナルティーも恩恵も無かった。

『コノ世界』の情報も爺さんや、その友人達のおかげで特に自由無く集められた。

だが魔術を魔法と呼び、殆どの魔法使い達はマギステル・マギ（立派な魔法使い）を目指しているのが普通だと教えられた時はさすがに頭が痛くなった。

20歳にもなって正義の味方を目指すのは正直無理な話だと思っただし、そんなモノになりたいと思っただ事も無かったからだ。

そんな僕に爺さんは『無理してそんな者にならんでもええよ』と優しく諭<sup>さと</sup>してくれた。

あの時はさすがの僕も爺さんの背後から後光が輝くのを感じた。

まあ、後にも先にも爺さんをそんな尊敬の目で見たのは最後だったが……。

粗方心の整理がつき、今ではこちらの生活にもかなり慣れた。

死ぬまで『コノ世界』で生きていこうという諦めにも似た心構えも出来た。

まあ、来訪当時の僕はまだ心が荒れていて、僕の心にゆとりを作る切欠になったのは主に、この第1亜種<sup>あしゅもんご</sup>門士ビルの3階部分全体を

戦場とした爺さんとの愉快で壮絶な触れ合いによる所が大きいのだが。

？

「オイ糞爺！ また僕のパンツ履いてるだろ！ さっさと今すぐ洗って返せ！ ? urisaz!」

「ぬ！？ なんじゃいきなりにその無茶苦茶な‘魔術’は！ パンツくらいどれも同じじゃろうが！ だいたい、古い先短い可愛いおじい様相手にそんな物騒なもん使うでないわ！ サギタマギカ・セリエス・グラキアーリス！ 集い来たりて敵を切り裂け。魔法の射手・連弾・氷の60矢！」

「うわあぶねえ！ テメーの‘魔法’だって充分に物騒だろーが！ 自分で可愛いとか又カしてんじゃねー！ 死ねやコラ！！ ? urisaz!」

「わほ！？ ! 掠った！ いまの頭に掠ったぞい！ 障壁張らなかつたら死ぬところじゃつたろうがこの馬鹿息子が！ だいた貴様の放つ魔法は凶悪すぎるんじゃ！ 改心せいや！ サギタマギカ・セリエス・グラキアーリス！ 集い来たりて敵を切り裂け。魔法の射手・連弾・氷の180矢！」

.....  
.....  
.....

？

思い直すと、あの頃は望郷の念に悩む余裕すら無かったんだろうな。

うん。

毎日が生存競争でしたから。……八八八。

ちなみに現在、当の爺さんは旅行中である。

おそらく南米辺りでバカンスを楽しんでいるのだと思う。

爺さんが出発する前に、「ここにはいつ帰ってくるか決めてないからビルのほうは好きにして良い」との許可を得た。

そして暇を持て余した僕は、悩んだ結果。

『コノ世界』で『アノ世界』と『同じ座標位置』の『同じビル名』の『同じ階層』で、かねてから自分の夢であった魔具店を開店しようと思つた結論に至ったのだ。

？

世界を救う為に異世界からやってきた勇者になる訳でも無く。  
世の為人の為にマギステル・マギとかいう正義の味方になる訳でも無く。

魔法界を侵略して新たな理想の国家を作る訳でも無く。

都内に魔具店を開く事になった僕、  
滝沢圭の物語。

『魔具店の店長は異世界人』……… 始まります。

## プロローグ（後書き）

オリジナル世界 ネギまの世界へという感じですよ。

主人公のいたオリジナル世界については本編で少しずつ触れていき  
たいと思います。

ニッケでした。

龍宮真名（とある春の1日）（前書き）

3つあるストックが尽きるまでは定期更新できると思いますが、その後……汗

## 龍宮真名（とある春の1日）

？

『異世界来訪』

この言葉を聴いて皆さんはどう感じるだろう。  
或いは次に何を連想するだろうか。

勇者  
魔王  
巫女  
生贄  
妖精

個人的に巫女さんはジャスティスだと思っただ……失敬。

とりあえず僕が思いつく限りでそれぐらいだろうか。

紆余曲折あつてそんな異世界来訪を果たした僕だったが、生憎と  
例中のどれにもなれる気がしなかったし、なる気も無かった。

できれば家族の居た元の世界に戻りたいが、理由すら不明でやっ  
てきたんだ。

来た方法がわからないのだから帰る方法だつてわからない。

と云う訳で、と言ってもどういふ訳かわからないだろうが、とり  
あえずそういう訳で、幸いこの世界にも魔術師 いや魔法使いで  
したか。

そういう連中が少なからずいる事が判明したので、僕は元来の夢  
である魔具店を開店するに至ったのだ。

店には一般人避けの結界を常時展開させているが、念のために作った看板には名目上、物細工アクセサリーショップという事になっている。物細工アクセサリーショップと言えどこかお洒落な印象を受けるだろう。印象は大事だと思うんだ。

場所は東京都区外にある古びたビルだ。

第1亜種あしゅもんご門士ビルという如何にも妖しげで胡散臭いビル名の3階部分に僕の店は構えている。

店内に入ると、細やか文様が掘り込まれた銀細工や変色した宝石を加工した宝飾類に東洋人形、中には西洋刀までの品物が所狭し、又は乱雑に並べられている。

しかも店に飾ってある品は総じて非売品と云う厚かましさ。

さらに言えば、うちで取り扱う品物はフルオーダーメイド制と来ているのだから尚の事始末が悪いだろう。

そんな僕のある意味個人的趣向が最大限に施された店『K』には今日も一風変わったお客さんがご来店なさっているようだ。

？

「なあ圭さん。人類の祖先たる大した力も待たないイキモノがなぜ生き残り。現在まで人類社会を形成できるに至ったのか知っているだろう。それは一重に‘生きる’為に‘頭’を使った事だと私は思うんだ」

唐突に人類進化の考察を述べられた。

「はあ、そりゃ随分と今更な話ですね……」

「そう。人は頭を使って生きていく。」

こんな事は常識であり、人類意思の根源に当たるものであり、人間ならば誰しも持つている共通意識なんだ」

「……結局の所、龍宮さんは何が言いたいんですか？」

「私がわざわざ電車で1時間もかけてこの店に来たのかなんて、賢い圭さんならわかつているのだろう？」

「とりあえず店に入ってくるなり弾薬代を教えた途端に拳銃を向けてくる人間なんて強盗以外の何者でも無いと愚考しますが」

犯罪イクナイよ！

「……圭さん。頼むから弾薬代をもう少し負けてくれ」

「はい？」

絶賛、銃口を額に押し付けられているオーナーこと、滝沢圭です。反対に銃口を僕の眉間に押し付けている方は最近になってうちのお得意様からの紹介でやってきた龍宮真名さん。

日本人とは思えない褐色の肌に黒くしなやかに伸びる黒髪。

睨まれれば条件反射で、或いは自己防衛機能によって財布を差し出したくなる衝動に駆られそうな三白眼。

何より特徴的なのは、10代中盤の中学2年生の‘少女’には思えない180センチはあるう抜群のスタイルをした体躯。

10代中盤の‘少女’には思えない180センチはあるう抜群のスタイルをした体躯。

大事なことなので2度言いました。

「圭さん？ 今心の中で思った事を口に出して行ってごらん？  
常識に凝り固まった脳髓を綺麗に掃除してあげるからさ」

「ごめんなさい。 ディスククリーンアップと最適化は間に合っ  
てるんで控えておきます」

「ちっ」

あからさまに舌打ちをかまして、渋々といったご様子で銃口を下  
げる龍宮さん。

さすがに血が上ってしまっていたのは自覚していたようだ。

龍宮さんはそのナイスでブラヴォーなお尻で応接室備え付けのソ  
ファーを殴り落とした。

表現は間違っていない。

ちなみに彼女が初めてこの店に来店したのは1週間前だった。

ご注文のレミントンM700用のライフル用7.62mmゴム弾  
を20発におまけのお手製の広範囲展開型エーテル体殲滅用弾薬を  
1つ付けて納品したのが2日前。

明日、昼の2時頃に店に出向くから必ず居ると電話を受けたのが  
昨日。

そして今日に至る。

「それで、圭さん。 どうして弾丸一つが80万もするのか説明し  
てもらおうか」

「いや、説明も何も……使ってみてどうでした？ 一応面白い物が  
出来たつもりだったんですが」

「ああ。 面白いどころかとても有効な物だったよ。

何せ着弾と同時に半径20メートルの鬼や妖魔達が根こそぎ消失

したんだからね」

そう言っつて龍宮さんは目を閉じて状況を思い出すような仕草をみせた。

美人はジャスティスです。

彼女まだ中学生だけど……。

「気持ちよかったですか？」

「ああ。快感だった……」

訂正します。

この中学生はとても危険な人でした。

「ん！？ いや違う！！」

なんとなく聞いてみただけなのだが思わぬ落とし穴だった。

純情初心で繊細な心を持つ中学生には思った以上に効果があったよつで頬を若干赤らめながらどこから取り出したのかわからないが44マグナムをこちらに向けてきた。

ここまでデリケートなのかと、さすがに僕も焦った。

「からかったくらいで拳銃抜くのやめてくださいって！

ほら、とつておいたケーキあげますから。

ケーキですよ！ しかもあの有名ソムリエが作ったって有名の！」

「ソムリエがケーキ作つてどうするんだ！ それを言うならパティシエだろう！」

「正解です」

「圭さん。さすがに私だつて怒るよ？」

「けつこうすぐに怒る気がしますが……。  
とりあえずケーキ出しますから落ち着いてくださいって、何も聴こえなかった事にしますから」

「やれやれ。 まったく圭さんは……。」

そう言えば、その弾丸の件は、その後が大変だったんだ。

同僚の生徒にはなんて物騒な危険物をぶっ放すんだと白い目で見られるし、魔法先生には出所を教えろと、しつこくせがまれたしね」

龍宮さんは、やれやれと両手を挙げて嘆息をあげた。

「ちよ！ まさか教えてないですよね！？ 嫌ですよそんな厄介な人間が大量に来られるのは」

「ふふ、厄介とは言うてくれるじゃないか。 勿論この店の事は吐いて無いよ。」

大体紹介が無いと来れないシステムになっているんだろう？」

「そういう事です。 信用してるんですから頼みますよ」

またも暴れだしそんな龍宮さんをなんとか宥めた僕は冷蔵庫からケーキと備え置きのお茶をテーブルに並べる。

僕から見た龍宮さんの印象は、まるで大人のような思考をしていて、でも子供のように癪癪を起こしたり……。

思春期真っ盛りの女性の扱いは難しいですね。

さておき、聞く限りではマジステル・マジを指す魔法使い達。

特に埼玉県に本拠を構える関東魔法協会なる組織団体は、僕からしてみると是非にお近づきになりたくない人種のようなので、この

店は完全紹介制の一見様お断りシステムを採用している。

紹介人は絶対の信用をおける人物しか紹介しないように言い含められているため、公にこの店が魔法関係者達に知り渡ることはないだろう。

「ふう。それで、この弾薬の事ですよね」

とりあえず場を取り直すように、龍宮さんのお目当てであろう銀色に光る弾薬を1つ取り出しそれを弄ぶように手の平の上でジャンピングさせる。

「まあコレ、詳しくは言えないですけど、‘召還’された対悪魔や対妖魔専用についた物ですからね。実験も繰り返したし効果があるのは当然……なのかな？」

思い出すとかなりの技術を詰め込んだ気がします。

エーテル素粒子の分解術式なんて物をライフル用とは言え小さな弾丸に刻み込んで、着弾と同時に瞬時に結界術式を展開し内々の効果範囲内に押さえつけるように制御刻印を施し、それを破邪の効果がある聖水で精錬させた物ですから。

時代は大きいものを小さいものです。

「ふう、やはり圭さんの自製なのか。ああ、確かに効果的な代物だった。

正直喉から手が出るほど欲しいさ……独占したいくらいにね？

警備の任務が楽になるし、何より私のような狙撃主には切り札になり得るシロモノだからね。

だがいくらなんでも1発80万は阿漕あせうが過ぎるんじゃないかと聞いているのね」

龍宮さんは言いたい事を言ったようでケーキをフォークで突き刺すように切ると子切れになったソレをモシャモシャと食べ始めた。

どうでも良いが、綺麗な女性はどのような仕草も栄えるもので、もしも、テレビのCMで僕がケーキを食べているシーンと龍宮さんがケーキを食べているシーンのどちらを放送するか、と聴いたら健全な精神の持ち主なら十中八九で後者を採用するだろう。

もし今、僕のシーンを選択した人がいたら、それははきつとよほど独創的な感性の持ち主か破滅的にセンスが悪い人間のどちらかだろう。

なんとなくそんな事を考えていた。

「圭さん？」

「ああ、すみません。」

唐突にフェルマーの最終定理が証明できそうになったので思考に沈んでしまいました。この弾丸の事ですよね。

まあ、製法自体は秘密ですが1発や2発精製するのにだってそりゃもう並々ならぬ苦労がかかってるんですよ。

効果も抜群だったでしょ？ だからテキストではなく適当な値段ですよ」

「いやいや、例え適当だとしても、中学生に要求する額じゃないだろう？」

良識ある大人としての対応を希望するよ」

龍宮さんは勝機を見出したかのようにニヤリとニヒルな笑みを浮かべた。

卑怯である。

ここで「自分が子供だから値引けやコラ」作戦なんて……。  
だが、悔しいかな僕の年齢は満21歳。

もはや法律上は立派な大人である。

題して、大の大人が「耳そろえて80万キツチリ払えやコラ」と  
美女中学生に迫る！

……僕が間違っているのかと思えてくるから不思議である。

「10発1セットを2セットで1000万で買おうと思う心積もり  
なんだが？」

……思考訂正。

其れを聞いて、外形に小さくルーン文字描かれた呪刻が刻まれて  
いる弾丸をポケットに仕舞った。

「普通の中学生が1000万円なんて大金の取引なんてしませんよ」

自然と値引きしてあげてもいいかなと思ってしまっていた自分の  
頭が急速冷凍された。

だが龍宮さんの余裕は消えることは無い。

「ふふ、うちのクラスメートには雪広グループの令嬢がいるんだ。

彼女は月に数千数億の金を動かしている」

なん……だと……？

いやいや、それ明らかにオカシイだろう？

どうしてしまった日本の取引市場。

たしかに雪広グループと言えば日本だけで無く世界規模でその名  
を知らぬサラリーマンはモグリだろうと言われるぐらいの巨大企業で  
ある。

だがいくらなんでも中学生が動かす金額じゃないだろう。

「最近の学生は……」

「わかつてくれたかい？」

僕の口を遮るように龍宮さんはそう言って紅茶に口をつけた。

なぜだろうか。自分が酷く間違っている大人である気がしてきた。

待て！ これは罠だ。

冷静に考え直せば取引市場がおかしい訳じゃない。

純粹にそのクラスメート‘も’おかしいんだ。

「麻帆良学園つてのはスゴイ学生がいるですねえ」

「まあ、学園と云うかうちのクラスがだな……色々と普通じゃ無いのは認めるよ」

「はは、ソレを聞いて安心したよ龍宮さん。安心して適切な値段を要求できます」

僕がそう言うと、しまったとばかりに顔を顰める龍宮さん。

「だいたいね。過剰品質つてのはつまるところ消費者の不利益に繋がるんですよ？」

「……それを言われると、悔しいが仕方ないね」

僕が価格交渉に勝利した瞬間だった。

龍宮さんはお手上げとばかりに机に突っ伏した。

心の中でガッツポーズ！

大人気無い？

褒め台詞ですが何か文句でも？

「ふう、圭さんとは長い付き合いになりそうだから今回は折れておくよ」

「ハハ、そこまで悔しがつて貰えると苦労して作った甲斐があったようで嬉しいです。ご期待添えてこの弾丸は正直まだ改良の余地はありそうだから勉強しておきます」

「私もそれなりのプロ意識を持っているつもりなんだが。こんな醜態を晒すなんてまだまだプロとは呼べないな」

「プロですか……。いいんじゃないですか？ 僕からしてみれば変に大人ぶって余裕持った龍宮さんなんて相手にしたくないですよ」

だつてまだ中学2年生でしょうに

そう言うと龍宮さんは擬音で例えるとガバッと起き上がり、自分でも驚いているかのように呆然とした後、ふふふつと口元を拳骨で押さえて笑いだした。

え？

何この反応？

「いや、すまないね。今日は圭さんにペースを乱され過ぎてるよ。うだ。学校や職場ではこのままではいけないな。明日までに自分を作り直さないといけないよ」

龍宮さんは落ち着きを取り戻し、紅茶を一息に飲むと自嘲的に口を開きだした。

ええっと……。

とりあえず思うのはこの子は本当に中学生でしょうか。  
自分を作り直す？  
キャラ作りですか。  
最近の女学生は大変ですね。

？

結局、龍宮さんはお手製の特殊弾丸を5発+おまけ1発の400  
万円でお買い上げ。

互いに納得できる良い商あきないが出来たと思う。

「悪いね。結局おまけの分圭さんに甘えてしまったよ」

まあおまけの1発は……その……なんだ……。  
僕もやっぱり美人には弱いわけで。

「まあ、またのご利用お待ちしております。来るときは  
電話くださいケーキでも買っておきますから」  
「ふふふ、私は洋菓子より和菓子派なんだ。できれば餡蜜を期待  
しておくよ」

「承りました。じゃあ東京で1番のソムリエのを用意しておきまし  
ょう」

「……だからパティシエだって」

「正解です」

「……もついい」

そう言って龍宮さんはどこかホクホクしながら帰っていった。

おまけ？

龍宮帰宅後の食堂にて

「なんだ龍宮？ デザート食べないのか？ 今日は餡蜜も置いてあるぞ？」

「いや、餡蜜はもう予約してあるからいいんだ」  
「珍しいな」

「ふふ、気にするな刹那。好物を1番おいしいと感じるように食べる方法は自分を程よく追い詰めた後に食する事だろう？ ふふ」  
「……………」

「ん？ どうかしたか？」

「いや、さすがに餡蜜は熟成云々関係無く痛んでしまうと思うが」  
「……………」  
「……………」

「すまない龍宮。私は何か間違えたのだろうか？」

「ああ。盛大に大間違いだ」

「……………」

そんな2人の食事シーンがあったそんな春の夕暮れ。

## 龍宮真名（とある春の1日）（後書き）

龍宮さんとの1日でした。

素朴な疑問なのですが、漫画とアニメの龍宮さんのイメージ違いますん？

どちらを参考にすればいいのか悩んだ結果。

まあ原作の漫画にした訳ですが、原作での龍宮さんって影薄くありません！？

キャラ掴めねーよ！

そんな理由で脳内龍宮さんを育成した作者に幸あれ。

ちなみに麻帆良学園は埼玉。

「K」は東京都という事で電車で1時間ほどの距離にありますね。

すいません。

ニツクでした。

青山鶴子（とある春の1日）（前書き）

ネギまには、世界観は同一の人物青山鶴子。

知らない方にもわかるように書いたつもりですが、詳しくは「ラブひな」を……。

## 青山鶴子（とある春の1日）

？

### 『異世界来訪』

この言葉を聴いて皆さんはどう感じるだろう。  
或いは次に何を連想するだろうか。

勇者  
魔王  
巫女  
生贄  
妖精  
女性剣士

個人的には女性剣士はファンタジーには必要不可欠なキャラだと  
思うんだ。

主にセクシー要員としてさ……失敬。

とりあえず僕が思いつく限りでそれぐらいだろうか。

紆余曲折あつてそんな異世界来訪を果たした僕だったが、生憎と  
例であげたどれにもなれる気がしなかったし、なる気も無かった。  
できれば家族の居た元の世界に戻りたいが、理由すら不明でやつ  
てきたんだ。

来た方法がわからないのだから帰る方法だってわからない。

と云う訳で、と言ってもどういいう訳かわからないだろうが、とり  
あえずそういう訳で幸いこの世界にも魔術師 いや魔法使いでし

たか。

そういう連中が少なからずいる事が判明したので、僕は元来の夢である魔具店を開店するに至ったのだ。

店には一般人避けの結界を常時展開させているが、念のために作った看板には名目上、アクセサリーショップ物細工という事になっている。

アクセサリーショップ物細工と言えばどこかお洒落な印象を受けるだろう。

印象は大事だと思うんだ。

場所は東京都区外にある古びたビルだ。

第1亜種あしゅもんど門士ビルという如何にも妖しげで胡散臭いビル名の3階部分に僕の店は構えている。

店内に入ると、細やか文様が掘り込まれた銀細工や変色した宝石を加工した宝飾類に東洋人形、中には西洋刀までの品物が所狭し、又は乱雑に並べられている。

しかも店に飾ってある品は総じて非売品と云う厚かましさ。

さらに言えば、うちで取り扱う品物はフルオーダーメイド制と来ているのだから尚の事始末が悪いだろう。

そんな僕のある意味個人的趣向が最大限に施された店『K』には今日も一風変わったお客さんがご来店なさっているようだ。

？

「どうも、お邪魔します。ここが『K』ってお店でよろしゅうんでひょうか？」

「ん？ ええっと……はいそうですか」

とある春の昼下がりに。

特に急いでやることも無いので店先を掃除していたら、赤い袴を着た偉い美人さんがそこにいた。

長く艶やかな黒髪に日本人形のような端正な顔立ちで、言い換えればまさしく大和撫子を絵に描いたような美人だった。

というかなぜ今時に袴姿なのだろうか？

「浦島ひなたはんの紹介で京都から来ましたものですよ」

「ああ、浦島さんのですか。とりあえずここじゃなんなんでお応接室へどうぞ」

「おおきになあ〜」

浦島ひなたさんとは、このビルの元の持ち主である爺さんの友人であり、結構な歳をめされているはずなのに現在も海外旅行などに頻繁に出かけるという、ウチの爺さんとタメを張るスーパーな老人である。

僕がこちらの世界に来た当時いろいろと世話になって、今でも時々旅行先からファックスや電話をくれたりと色々気にかけてもらっている。

まあ、浦島さんの旅行先がどこであったりとか、何をしているのかは一切不明なのだが……。

「それでは改めまして。この店の店長をしています滝沢圭と申します。

親しい人は圭と呼びますので、どうぞよろしくお願いします」

「〜丁寧にごもおもお。

京都神鳴流宗家名誉総代を務めとります青山鶴子云うもんです。鶴子でかまいまへんで？ どうぞよしなにい」

驚いた。

青山鶴子と言えば長い神鳴流の歴史の中でも歴代最強と誉れ高い人物だ。

この世界の世情に疎い僕だって、その名前と伝説くらいは聞き及んでいる。

曰く、神切りの鶴子。

曰く、1人軍隊。

曰く、剣聖。

曰く、ラスト侍。

最後のは少し違う気がするが。

とりあえず生きた伝説を地で行く人なのは確からしい。そんな方がいったい何の用だろうか？

「それで本日はどういったご用件でしょうか？」

「いやな？ ヒナタはんから、ここには珍しいモンがぎょうさん置いたるから、うちが探したはるモンもきつと見つけられるやると聞きましてな？」

朝イチで京都から新幹線でやって来たんどすわぁ」

京都から駆けつけてくれたのか。

嬉しいが、そこまでして欲しい物は一体なんなのだろうか。

日本伝承に出てくる名刀類と同じような品が欲しいとかだったらどうしようか。

さすがに概念武装とかは作れませんって。

「はぁ……。置いてある品は基本販売してないですし、注文と云う形なら承りますが、一体どのような品をお探しなのでしょうか」

そう言って話を促そうとはいいいが、鶴子さんは、告げるのを恥ずかしそうに両手を揉みながら言葉に詰まっていた。

察するに深刻な問題であるのだろう。

鶴子さん程の人が口にするのを躊躇う品物。

相当に厄介な香りがしてきたゼコンチクシヨーめ！

「んとなあ。　とりあえず状況説明からさせて貰ってもええでっしやるか？」

「はい。　ちょうど餡蜜があるんで食べながらもゆっくり聞きましよう」

「餡蜜どすかあ！？　ウチの好物どす。　あ、でも」

空気を和らげようと意図したつもりだったのだが、またもや鶴子さんは、何か困ったようなご様子。

彼女は人差し指でそのふっくらとした瑞々しく艶のある下唇を押し上げた。

うむ。　実に色っぽい。

人妻の色気むんむんである。

しかもモンモンである。

何が言いたいか？

僕の心に眠る何かが雄たけびをあげたって事さ。

「ん？　遠慮なんかしなくていいですよ。　そもそも男1人で食べても味気無いですしね。　付き合いたと思ってリラックスしながらお話ししよう」

「……仕方ありませんな。　圭はんがそこまでおっしゃるなら喜んで頂かせてもらいますう」

多少落ち着いたのか鶴子さんはソファに優雅に腰を降ろした。

そういう動作のひとつひとつも教育の賜物なのか、京都の育ちの風土ゆえか、気品があつて絵になるなあつと心の中で感嘆の声を漏らした。

その後、2人で餡蜜を頬張っていると鶴子さんは意を決したように語り始めた。

？

青山家とは古来、平安の世より退魔の剣術である京都神鳴流の宗家を務めており、当時の都を代々に渡り妖あやかしの類をから守つてきた事で知られ、剣を志す者でその名を知らぬ者はいないと呼ばれる程の名武家であつたそう。

青山鶴子と云う人物はそんな青山家の長女としてこの世に生をうけ、勿論のことに幼い頃から京都神鳴流の指南を受けていたそう。

彼女の剣の才は幼少みぎりの砌より卓越しており、その腕はいつのまにか上にも下にも並ぶ者無しまで言われ、彼女自身もそれを誇りに思つて剣を振るつてきた。

だがそんなある日、妹である次女の青山素子の剣を見て、その才は自分より優れたモノであると感じた。

最も才に溢れ、最も強き者が京都神鳴流の跡を継ぐべきだと考えていた青山鶴子は悩んだ結果、素子に神鳴流を託そうと厳しく教育した。

それと同時に兼ねてより話のあつた婚姻も受ける事にした。

その時、少しは女性らしく生きてみたいという鶴子なりの女心もあつたのだ。

もちろん、その道のりは順風満帆では無く問題だつて起きた。

姉妹間での些細な思い違いから、宗家の技を継ぐはずだつた素子

がある日神鳴流を出て行ってしまい東京の大学を目指すと言い張るといつトラブルもあったそうだ。が、今でそれも無事解決した。結婚後の青山鶴子は後輩の指導等の裏方に廻り、夫婦仲も円満であり。

それなりに楽しく日々を謳歌していた。ここまで聞いても青山鶴子が現状抱えている問題は見えてこないだろう。

それは、結婚して数年が経ったある日の事だった。

いつものように青山鶴子は1日の家事を終え、汗を流そうと入浴をしに洗面所に向かった。

そこで事件は起きた。

青山鶴子が興味本位で久々に体重計に乗ってしまった。

その時に

？

「ええーつとつまり……痩せたい……と？」

鶴子さんは顔をりんごのように紅潮させながらこくりと頷く。

「もしかして、餡蜜を食べる時に悩んでいたのも？」

「またもこくりと頷く鶴子さん。」

「ぶっちやけ太ったと？」

ひっじょ～～～～に、しょうも無いことだった。

鶴子さんはすべて言い切り体中をプルプル震わせ……

「ハッキリ言わんといてーな！！　　これは大問題なんやえ！？」

嘆くように叫びだした。

どうやら大問題らしかった。

「圭はん。乙女の秘密をここまで聞いたんや。

もしも解決できへんかったらその首もらいますえ！？」

どうしようも無く、尚且つ滅茶苦茶くだらない事で死亡フラグが立った。

「うっそー！ー！！」

僕の心に眠る青山鶴子像がメガクラッシュした瞬間だった。

依然として鶴子さんの鼻息は荒い。

顔だけで無く先ほどまで雪のように真っ白だった肌も今では全身がさくらんぼのような赤色に。

「それで何かあるんでっしゃろ？」

「いや、そんな事言われましても、出来なくは無いです健康に悪いですし……」

体内の気や魔力を無理やり放出させる、本来拷問用に作成した魔具ならあるが、鶴子さんほどの達人級の気になると、魔具自体の耐久力が持つのかも妖しい。

何より健康に悪いのだ。

まさかダイエットを目的を使用する事になるなんて僕も考えていなかったし。

だから、さすがにそれは無しの方で。

「勿論、そんな簡単に都合良くは無いて、わかっとなるつもりどすえ？」

意外と脳は冷静だったようだ。

大人の女性はこれだから違う。

少し安堵した。

「せやけど、今更表立って道場で剣振り回すのも、体裁が悪うし。

なんか必死になって若作りに励んでる思われるのも癪でっしゃろ

？ だからヒナタはんに相談して圭はんを紹介して貰ったんや。

ほら何か出しい！ 30秒以内に何か出しい！！！」

訂正します。

この人は龍宮さんを大人にしたような性格でした。

鶴子さんは奇声を発し、声を荒げて叫びだし、今までどこに差してあったのかわかないが、銀色に鋭く光る大太刀を振り回し始めた。

「ちょ！ 待った待った！ とりあえず倉庫見てきますんで！」

このままでは店どころか本気で死にかなないと判断した僕は全速力で倉庫までダッシュ。

すぐさま倉庫に駆け込んで乱雑に置かれている品々をあれでも無いこれでも無いと漁っては投げ捨て、潜っては左右を見渡し何とかなりそうな物を……

見つけた！！

？

「ほんまにコレで痩せるんか？ 正直、こういつモンは、ようわからんのやけど……」

「大丈夫ですとも！ 全世界1000万人以上の人が効果を実感しているようですから」

……ただし、続けられればですがね？

「ふふふ、その挑戦受けたりましょ」

「全部終わる頃には、きつと効果が現れているはずですよ。 数点、オマケもつけましたしね」

「それじゃ報酬は成功報酬で振り込んでおきますう」

「ハイ。 お元気で。 くれぐれも体に気をつけて無理はなさらないでくださいね」

「はいなあ。 それじゃおおきにい〜」

その言って、鶴子さんは京都へ帰っていった。

両手に大きく膨らんだ風呂敷携えて。

言わずもがな、風呂敷の中身は

『ビリーズブートキャンプ』



青山鶴子（とある春の1日）（後書き）

なんとベタな……。

ご拝読ありがとうございました。

ニッケより。

葛葉刀子（とある春の1日）（前書き）

ゆっくり茶でもしばきながら読んで貰えれば幸いです。

## 葛葉刀子（とある春の1日）

？

『魔具店』

この言葉を聴いて皆さんはどう感じるだろう。  
或いは次に何を連想するだろうか。

マゲ？

馬愚？

マゲ？

チヨンマゲ？

さすがにここまで稚拙で愚かな発想をする人はいないだろうが、  
おそらく多くの人が頭を傾げて何の店の事だろうと思案にふけるこ  
とである。

単純なのか複雑なのか神秘の怪奇なのかただの予定調和なのか、  
とかく検討も想像すらまとも出来ない突拍子も無い事態が身につき  
た僕は、紆余曲折あってめでたくない異世界で生活する事になつた  
のだった。

と云う訳で、と言ってもどうい訳かわからないだろうが、とり  
あえずそういう訳で僕はこの僕のいた世界と何かが微妙にズレてい  
るこの異世界で元来の夢である魔具店を開店するに至ったのだ。

東京都郊外にある第1亜種門士ビルあしゅもんどという如何にも妖しげで胡散  
臭いビル名の3階部分に僕の店は構えている。

ビルの3階フロアに階段で登り入り口でまず目にするのは『物細工店 K』と書かれた小さな看板と剥製のような今にも声をあげて動き出しそうなほどリアルな白黒のブチ柄をした招き猫が置いてあり、少々店主の趣向の奇抜さを感じて貰えると思う。

さらに進むと、多種多様の商品が無作為に置かれた店内。

30平米くらいはあるだろう。 ゆったりとした広さだ。

さらに店内を挟んでに左右に扉が、店内奥のレジの向こうにも扉が一つ、左の扉を開けると工房に右の扉を開けると応接室が、奥の扉を開けるとそのまま先は僕の住居スペースがある。

そんな僕のある意味個人的趣向が最大限に施された店『 K 』には今日も一風変わったお客さんがご来店なさっているようでは無く。

僕は今現在、店から車で1時間ほど離れた横浜にある、横浜港が見渡せるお洒落な喫茶店に居た。

喫茶店は全席オープンテラスと、横浜港の利点を最大限生かした造りになっている。

冬の営業はどうしているのだろうかと思わなくも無いが、基本的に若者は洒落た見た目と空気を気にするので問題無いのだろう。

それで、元来出不精で1年365日の過半数以上の日々を自宅で過ごしている僕がこんな似合わないデートスポットの定番の場所ですり珈琲なんぞを飲んでいるのかと問われれば、ただの待ち合わせなのだ。

そう、切欠は1ヶ月程前に疾風怒濤の嵐のような勢いでやって来た青山鶴子氏からの電話が始まりだった。

？

「もしもし？ 滝沢ですか？」

「ああ、圭はん？ ウチや、鶴子ですか？ 安生やつとりますかあ」

「はあ、そこそこに普通です」

「ふふふ、そりゃ重畳どすう」

当たり障りの無い常套句を数回交わし、鶴子さんはその後数十分に渡って旦那さんが最近構ってくれないだの、姑が口煩くてかなわん、仕事で一緒になった関西呪術協会の陰陽師の目がやらしくて、切りたくなつた 等の、僕としてはこの電話を切りたいと思う、かなりどうでもいい話を一方的に聞かされた。

「それで会って欲しい人がおるんどす」

「紹介ですか？」

「いや、そういう仕事関係とはちょっと違うんよ。 実はな」

本題に入るまでが遠回りしすぎだと思わなくも無いが、とりあえず鶴子さんの話を要約するところだった。

鶴子さんの妹弟子で20代後半の女性がいるのだが最近電話口で話す彼女が、どうも元気が無く覇気が感じられないらしい。

彼女は今から7年程前に関東魔法協会の魔法使いと婚約し、関東に籍を移したのだが結局そりが合わずに離婚してしまった人だそう  
な。

関東魔法協会の長の計らいでそのまま関東魔法協会に所属しているのだが、元々関西呪術協会に所属していた経緯もあってか心の内を相談できる相手も少ないのではないかと 心労が溜まっているのではないかと鶴子さんは心配らしい。

そこで、関東にも関西にも所属していない一介の商人である僕に

焦点を当てたそうだ。

ハッキリ言うとお大迷惑である。

僕としては魔法関係者で関東魔法協会に所属している時点でお断りを入れようと思ったのだが、鶴子さんの話を聞く限り、かなりの美人さんだそうだ。

半自宅警備員と思われても仕方の無い生活をしていて妙齡の異性との出会いなぞ、最近はとんと無い僕としては大変魅力的なお話であり、あれよあれよと鶴子さんの口車に乗せられるがままに……。

「ほな、私の変わりにしつかり相談にのったってなあ〜？」

「まあ、出来る範囲でなら頑張ります」

「それで構わんよお。相手の名前は葛葉刀子やからな」

「了解です。それでは」

‘鶴子さんの友人の魔法関係者’としてならと云う条件付で了承してしまった。

男は綺麗なお姉さんに弱いのである。

コレ、宇宙の真理である。

？

「美人なお姉さんは好きですかああああ！！！！？」

「えっ!?!？」

「すみませんつい叫ばなくてはならない衝動に駆られて、気にしないでください。どうも初めまして滝沢圭と申します」

「はあ……、葛葉刀子と申します。本日は先輩が無理を言ったようで申し訳ありません」

さすがに奇抜過ぎたか……龍宮さん辺りなら言い反応を示してくれそうだ。

今度試してみようか。

とりあえず、申し訳無さそうに苦笑いを浮かべ一礼した女性。

葛葉刀子さんはシルクのように艶々としたロングストレートの髪を春風に靡なびかせてやって来た。

知性的な雰囲気醸し出してるのは眼鏡ゆえだろうか『有能秘書』或いは『エリート家庭教師』といった印象を受ける美人だった。

タイトなスーツに身を包んだその姿は働く女性を体現しているかのように、ミニスカートから伸びた程よく引き締まった長い足が、目の置き所に困ってしまうものだった。

眼福である。

つとまあ、そんな僕の邪よこしまな思考はともかく、どうも葛葉さんは、鶴子さんから無理やり駆り出された僕の顛末をご存知だったようで、僕が声をかけた当初からひどく申し訳無さそうに恐縮気味であった。

普段からどんだけ無茶言ってるんだ鶴子さん。

「鶴子姉さんは昔からいつつも強引なんですよ」

「なんかわかる気がします。唯我独尊と云えばいいんですかね」

自由奔放な姉に付き合わされる妹はこんな感じなんだろうなっと思っほど葛葉さんは慣れたように鶴子さんへの文句を言い始める。

だが、文句と言いつつも、鶴子さんを思う気持ちがヒシヒシと伝わる。

そんな会話だった。

「ところで葛葉さんは標準語をお喋りになるんですね？ 鶴子さんの妹弟子と聞いていたのでてっきり関西弁の方かと」

「関西弁はどうしてもものんびりしちゃいますから。教師と云う職

業上、女性だからと言って生徒に舐められる訳にはいきませんしね」  
「それはそれは……」

それにしても会話の節々に凜とした真つ直ぐな自分の意見を言う人だなあっと思って憧れにも似た感情を持つてしまう。

僕は主義とまではイカないが、基本的に‘事なかれ’な人間なのでこういう人を眩しく感じてしまう　結局は子供みたいな無い物ねだりなのだが。

いや、そんな話よりまず相談にのれよ！　と思われるかも知れないが、初対面の人に、しかも異性で年下の僕なんかにいきなり悩み事を喋りだす人間なんている訳がない。

「実は悩み事って言うのはその生徒にも関係してくるんです」

訂正。

ここにいました。

鶴子さんといい葛葉さんといい神鳴流の人は一般的な物差しでは計れない精神構造をしているのでは？　と思ってしまう自分を誰が責められよう。

「滝沢さん？」

「あ、すみません。　ええ……つと続けてください」

「はい、実は私、ある生徒に請われて軽く神鳴流の手解きをしているんです」

「え？　神鳴流をですか？」

「はい、そうなんです。　と言っても軽く手合わせする程度なんですけどね」

神鳴流の剣術というものは意外にも門戸を広く開けている。

京都では剣道を齧った経験があるのなら多かれ少なかれ、例え神鳴流という名前を知らなかったにせよ関わりができてしまう程に、その草根は広く社会に浸透している。

だが、神鳴流の技は一般人には危険すぎる力なので、‘退魔’を掲げる真の意味での神鳴流を手解きを受けるとその数は極端に減る。

つまり、その生徒は裏の関係者であるという他ならない。

「指導法に悩んでいると？」

率直に聞いてみた。

得てして思春期の真っ盛りの子供という者の指導はとても難しい。

反発。

癩癩。

矜持。

純思。

そんなものが複雑に絡み合い……いや、育ってきているからか。本人が自覚もしないままに指導者を悩ますというケースは多い。正直に告白すると僕もあの頃は教師や両親をよくよく困らせていたと思うからで……反省。

「いえ、指導については特に問題無いんです。むしろ私の助言を素直に受け入れて手合わせする度に強く輝きが増していくんです」

「はあ……」

「性格も真面目でさらに」

葛葉さんの生徒自慢(?)は続いていく。

だが、聞くほどに不思議に思う。

ものすごくいい生徒じゃないかと思う。

葛葉さんは注文した紅茶に口をつけ、ふうっと一息ついた。そして、語るように話始めるのだった。

「ふふ、教えれば教えるほど。叩けば叩くほどに強く輝いて行く。……それを見てなんだか私もこの子みたいに輝いてるのかなって思うと」

？

子供はよく草花の芽に例えられる。

環境という土を与え、助言という水を与え、愛情という肥料を与えると芽はすくすくと伸びる。

ひとしきり成長した芽はあとは自分の力で成長を続ける。

それは世話をしている者の思惑さえも超えるように、力強く眩しいほどの生命力を漲ぎらしながら……。

詰まる所、葛葉さんは自分の生徒に嫉妬の感を覚えてしまっているのだ……教師として、指導者として間違った感情を抱いてしまっている彼女自身が一番わかっているのだから始末が悪い。

だから悩む。

答えでない。

答えを出しては自分が大切に育てたモノが、もしくは自分そのモノが壊れてしまうのは無いのかと云う深い思いを胸の内に秘めながら、同僚の教師の誰にもそんな濁った自分の悩みを相談できずに……。

？

それを聞いた僕の感想は……すいません。

なんとも言えないです。

予想以上に僕にはハードルが高くて重い問題でした。

何が「相談にのってやってな〜」ですか鶴子さん。

「すいませんね。こんな面白くも無い話を聞いて貰って。ふふ、

話だけでもスッキリしました」

「いえ、どうもお役に立てなさそうで。すいません」

「気にしないでいいですよ？ 年下の異性の方に相談って何だか新鮮でしたし……ね？」

僕から見た葛葉さんは今にも爆発しそうで。

それでも、自分の立場、役割、義務の為に必死にその暴走を抑えているようだった。

僕には荷が重過ぎる。

重量過多で沈没寸前なんてタイタニック号以上の悲劇にもならぬいし喜劇にだつてなりもしない。

「今にして思えば初対面の方にいきなりこんな話をしてしまって迷惑でしたよね？ ごめんなさい。ただ、滝沢さんがあまりにも正直そうな方でしたから反応が面白くてついつい口が滑ってしまいました」

「正直そう……ですか？ 僕が？」

はて？

そう言われたのは初めてだが。

そんなに正直そうなのだろうか？  
こづいづのは自分では気づかないものなのだ。

「ええ、会ってから、チラチラと私の胸や足ばかり見ていましたよね？」

滝沢圭、一生の不覚だった。

いや、これはオスとしての本能と言いますでしょうか。

ここまでバレているのに、慌てて否定するのも何だかなあと思つたので素直に謝ることにした。

男子こやめ潔はらしなり。

「ふふふ、恥ずかしがらなくてもいいんですよ。私もまだまだ若い子に負けない魅力があるのかなと自信が持てましたし、話してる最中も終始『自分には荷が重いなあ』って雰囲気溢れていましたから。ふふふ、だから正直そうな人だなんて」

「はあ、なんだか色々勉強になりました」

葛葉さんはやっぱり大人で、僕は21にもなるのにまだまだ子供で……そんな事を思った。

それに僕を見てカラカラと笑顔を浮かべる葛葉さんは、なんだか子供が悪戯に成功した時のような……そんな純粋な笑みで僕もつられてついつい自分の顔が頬が吊りあがってニヤけてしまった。でもこのままじゃなんだか一方的に負けたようで面白くない。だから、僕は葛葉さんの手を握って

「それじゃあ、葛葉さん。いや、もう刀子さんと呼ばして貰いましょう。僕をからかった罰として、今日は1日デートに付き合っ

て貰いましょうか。ちなみに拒否権はありませんよ？ 刀子さん

のせいで、僕のピュアな心が傷ついたんですからね」

テラスから真つ先に見える山下公園に向かって歩き出す。

「え？ ちょっと滝沢さん？」

突然事に戸惑う刀子さんを無視して強引にエスコートさせて貰うことにした。

ちよつとくらい役得があってもいいだろう？

そんな気持ちだった。

「あ、でも僕ってあんまりデートとかしたこと無いですし、退屈させたらすいませんね。」

猫に噛まれたと思って今日は付き合ってください」

歩き出してから気づいた事だが、こつちの世界に来ててんやわんやと日々を繰り返してきたのでデートなんてしばらくぶりだって事に気づく。

そんな僕を見て刀子さんはまるで弟か生徒を見るような目で

「もう、仕方ないですね。わかりましたよ、圭くん。今日は大人のお姉さんが色々教えてあげましょう」

と諦めたように肩を竦めた。

そのときの刀子さんの顔を見て僕は、少しだけ、ほんの少しだけ‘つつかえ’が取れたんじゃないのかな？……そう感じたのだった。

？

「ところで、『大人のお姉さんが色々教えてあげましょう』ってなんだか素敵な響きですよ。具体的にどこまで教えて貰えるんですか先生？」

「……あんま調子のりすぎるとお姉さん、つい刀が滑ってしまえますが？」

僕のそんな終春の1日。

おまけの？

麻帆良学園のとある寮室にて。

龍宮が扉を開けると、そこには刹那が明かり点けずにベッドの上で寝転んでいた。

「刹那、今日は1日部屋にいたのか？」

「今日はお嬢様も学園長と御用事があるらしくて……」

お嬢様成分が足りないとか言い出しそうな刹那に龍宮はげんなりした。

「葛葉先生の所には？」

「いえ、それがどうも男の方と待ち合わせみたいで、断られてしまったのだ」

「そうか、葛葉先生もたいへんだな」  
「何がたいへんなんだ？」

「……わからないのか？」  
「？」

「もういい、私も今日はもう寝る」  
「どうした？ 機嫌が悪いな。何かあったのか？」

「電話に出ないんだ。今日だけでももう5回もかけているのに、まったくあの人は……」

「誰に電話をかけたんだ？ 大した用じゃなければ程々にしておけよ？」

「そうだな、大した用は無いんだ」

「だったら止めとけ。だいたい5回もかけて迷惑だろうに……。しつこい奴だと思われるぞ？」

「……刹那。少し表にでしょうか？」

「……私はまた何か間違えたのか？」

「……ああ、またもや大間違いだ。いや、一応正解だ――」

「ならばなぜ！？ とうか落ち着け！！ そして銃を降ろ……キヤ――！！！！！！！！」

今日も、麻帆良は平和だった。

葛葉刀子（とある春の1日）（後書き）

ボツネタが2個できました。

むむ〜〜。

とりあえず次回は季節が巡って『夏』になる……かなあ？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4517k/>

---

魔具店の店長は異世界人

2010年10月13日18時14分発行